事業企画書

企画名「カンボジア王国医療へき地の病院へ機材を贈るプロジェクト」

プロジェクトの概要

１．　事業実施の背景と必要性

① 提案事業を実施する対象地域

カンボジア王国コンポンソム州コンポンセイラ郡オバックロテ地区

（添付資料１参照）

② 対象地域の社会的・経済的背景

過去の内戦による社会経済的ダメージからようやく回復の兆しを見せつつあるカンボジア王国（以下カ国）だが、特に都市部を離れると、いまだ基本的社会サービスの普及には至っていない。医療サービスもその例に漏れず、地方に行けば近隣に医療施設のない地域が多く存在する。

カ国総体としては経済発展のさなかにあると言えるが、貧富の差は確実に広がっており、物価の上昇などの要因によって、地方住民の暮らしはある面では以前より悪化していると言える。

対象地域であるコンポンセイラ郡に関しては、国道４号線が走り、小高い山々が連なる地域に属する。雨期には大量の雨で道が溢れ、乾季には水へのアクセスが困難になるなど、自然環境的に農業には厳しく、その関係から人々は小規模な木材の伐採で細々と生計を立てているケースが多い。食料自給率が低く、食材は市場での購入となるが、木材の伐採も季節に左右される仕事であり、時期によっては満足な食料を確保するだけの現金収入がない貧困家庭が多く存在する。

教育に関するデータを見ると、コンポンセイラ郡が属するココン州において、学校教育を全く受けていない人口の割合は女性で 32.6%、男性 17.9%となっている。これは、地方部における同データの平均（女性 26.4%、男性 14.1%）よりも高い。[1]

[1] Cambodia Demographic and Health Survey 2005 よりコンポンセイラ郡は 2008 年末にココン州からコンポンソム州に配属が変更された。データが集められた 2005 年時点ではココン州の所属となる。

＜写真１：コンポンセイラ郡内の村の遠景。山々が連なる＞　＜写真２：山を背に抱いたコンポンセイラ郡の家屋＞

③ 対象地域の概況・問題点およびその地域への協力が必要と考えられる理由

コンポンセイラ郡では、村によっては直近の公立診療所まで 30 キロメートルも離れているため、なかにはこれまで適切な医療機関にかかったことがない住人も多く存在する。医療機関までの交通費が大きな経済的負担となる場合が多く、病が重篤になるまで医療機関にかからないケースが見受けられる。

また、カンボジアの国際港と首都プノンペンを結ぶ国道 4 号線上に位置する関係から、交通事故が頻発する地域でもある。国際港から石油やコンテナを運ぶ大型車両が多く、ひとたび事故が起きると大事故となるケースが多く見られることも特徴の一つである。

＜写真３：国道４号線での事故の一例。大型トラックが乗用車に馬乗り状態＞

コンポンセイラ郡オバックロテ地区プレイピセ村では、4 年前よりアメリカ人のピーター・リー博士が運営する「The Cambodian Dormitory and Education Project（以下 CDEP）」によって、持続可能な開発を目指した総合的な農村開発プロジェクトが実施されていた。同博士は 2008 年に日本の NGO 団体「NPO 法人サイド・バイ・サイド・インターナショナル」と知り合い、カ国支援を志す同志として協力関係が生まれた。現在同博士はサイド・バイ・サイド・インターナショナルのカンボジア現地事務所代表としても活動している。CDEP は 4 年の歳月をかけて農業や治水、自然エネルギー、建築などを住民とともに同地で実施してきたが、医療不在による住民の健康被害は著しく、早急な改善が懸案事項であった。さらに、国道 4 号線上に適切な医療施設がないことから、交通事故被害者は 150km から時には 300km 近くの長距離をプノンペンまで搬送され、その途中で死に至るケースが多く発生していることも大きな課題であった。

＜写真４、５：The Cambodian Dormitory and Education Project のサイト＞

そのような中、日本の学生ボランティアサークル「グラフィス」より、カ国のへき地に診療所建設の支援をしたい旨がサイド・バイ・サイド・インターナショナルへ打診があり、ピーター・リー博士率いる CDEP の活動地、コンポンセイラ郡内オバックロテ自治区プレイピセ村への診療所建設支援が 2008 年 4 月に決定、実行に移された。
同診療所は「グラフィス診療所」と命名され、現在建設中である。グラフィス診療所は自然との共生、自然エネルギーの導入、省エネを考慮してデザインされており、カ国では画期的な試みとなる。また、将来的には交通事故などの外傷治療にも対応できる施設となる予定である。
同診療所は人道的医療を第一義としており、貧しい人々にも平等に医療を提供する施設となる。

グラフィスからの建設費支援とサイド・バイ・サイド・インターナショナルによる医療機材の支援によって建設が進められている同診療所だが、昨年度の原油価格高騰のあおりを受けて資金不足にあえいでいる。現在は CDEP の資金によって建設が進められているが、完成後に整備すべき診療所内設備がまだ十分に確保できていない。

＜写真５：グラフィス診療所建設風景＞

④ 提案される支援内容

<u>診療所に必要な医療機材、備品の寄贈</u>

適切な医療を提供するためには、必要不可欠な医療機材がある。また、日々の診療所運営のうえで必要な備品の支援も求められている。

詳細な寄贈物品については添付資料２を参照。

⑤ 支援後のサポート体制について

同診療所はサイド・バイ・サイド・インターナショナルが今後も継続して支援と活動のモニタリングを実施する。また、元 RI2660 地区財団奨学生、西口三千恵（本企画書の提案者）が CDEP のピーター・リー博士のアシスタントとして現地で活動を実施するため、寄贈後の報告等も滞りなく実施される。また、診療所には支援団体としてロータリー・クラブの名前とロゴを掲示する。